

九三四年)。別のところで柳田は、女兒のえくぼに愛敬よく人に認められるのを秘かに待ちうけるしあわせ観を描いていた。努力して得られるアチーブメント型の幸福(ハピネス)とめぐり合わせのよさを期待する待ちうけ型のしあわせとの対比である。後者を敷衍すれば、明言を伴わずにモノとふるまいに託して掛ける願もこれに含まれる。良縁・子宝・合格祈願から治病・厄祓い・縁切りのお百度にいたる迄。より日常的な場面では、水商売を含めて客を待ちうける商いの仕方もこの型である。

とはいえ能動・受動のいずれにおいても欠けているのは「他者」の項である。タイセン、岩田靖夫らは「人間の自律モデル」(ギリシア)に加えて「隣人の幸福モデル」(ユダヤ・キリスト教)に注目した。この場合、前者は近代アチーブメント型の源流であるから全部をあわせると三つの類型になる。「能動・受動」と「自己・他者」をかけあわせてできる四象限にこれらを配分すると、受動かつ他者の象限に空白が残るだろう。ここにスカブラを入れてみたい。自分ひとりのではなくあいだの幸福(鈴木大拙の「社会性」を求める意味では「他者」であり、自覚的でも主体的でもない点では「受動」である。なぜ自覚的ではなく、ましてや自己言及性にも欠けるかといえ、この営みが民俗Ⅱハビトウスの次元で展開することにかかわる。中世神学用語のハビトウスをアクトウスと対比させ、顕在化しない行為未満の性能にそなえの訳語を与えたのは清水哲郎だった。すなわち「そなえの民俗」はアチーブメント型の視野には回収されえない微妙な役立ち方をする。

そもそも幸福の問いは、柳田の調査項目に端を発し、利他の道をそれだけしかないかのように歩む菩薩にかかわる。ひとの又はいだの幸福に献身するこの人間像には、たんなる善意(独善と摩耗の虞)でなく、そうなることが自ずと必然であるかのように人を救うベクトル(本願の働き)がそなわっている。宮沢賢治は全体の幸福なしに個の幸福はありえないと主張した(『農民芸術概論綱要』)。その「雨ニモマケズ」に描かれたデクノボウの原形は法華経の常不軽菩薩に比定される。会う人ごとにあなたは仏になると云って礼拝するこの奇妙な菩薩像の、民俗版・日常版としてスカブラ型を考えることは可能か。ならば菩薩とはいったい誰であるのか?

自然概念にまつわる言説空間——現代日本の場合——

近藤 光博

本発表は、『宗教と世俗のあいだ』の説明記述を通じて、『宗教／世俗』論の精緻化をはかるべく、現代日本語の「自然」がいかなる性質と働きをもち、『宗教』や『世俗』の制度／概念／観念とどのような関係をとっているのか、明らかにしようとした。方法は、現代日本語で「自然」という語を用いた発話を大量に収集し(最終的に三五二件が集まった)、それらに言説分析をほどこすというものである。

調査研究の結果、現代日本語話者が「自然」という語を宗教概念から引き離そうとする傾向のつよさが判明した。

自然概念に宗教性を認めない立場として目立つのは、客観的で物質的な世界を「自然」とみなす立場、「宗教」を人工的／

作為的とする立場、『自然』の普遍性／全体性↑↓「宗教」の特殊性／部分性』という対観念を擁する立場である。最後の立場は、宗教概念に負の、自然概念に正の価値を付与する立場に通じる。

一方、明確に「宗教的」と形容される自然概念は『世俗と宗教のあいだ』を構成する諸語を伴う場合が多かった。すなわち、生命と癒し、非日常性、生死、幸、美、基準などで、とくに目立つのは、自然の絶対性／圧倒性／制御不可能性、およびそこから生ずる畏怖の感覚である。宗教概念がしばしば負の価値を帯びる点に鑑み、こうした発話では、自然概念が帯びる正の価値が、宗教概念の積極的な価値づけを引き出しているように思われる。

義務教育課程教科書、NHK、新聞全国紙など、現代日本語の言説空間における上からの権力作用としての「自然」という語の使用についてみれば、権力的な自然概念にはかなりつよく世俗性(＝非宗教性)がみられた。ここに、権力構造の低位を構成する小説・CM・漫画などにおける自然概念(宗教性がより高い)をおくと、その上から下に向かい、かなり明確なグラデーションが観察された。こうした権力作用は、現代日本語の自然概念を世俗性(＝非宗教性)へと一定程度傾かせる要因のひとつと仮定しうる。

以上から『宗教をめぐる現代日本語の言説空間』を記述しなおせば、次のようになる。

「自然」という語は、『宗教と世俗のあいだ』の領域を流通する。明瞭に宗教的な自然観と明瞭に世俗的(＝非宗教的)な自

然観の両方が、量的にはごく小さいものの、ほぼ同程度の闊達さと強度で、二つの極として立ち上がっている。両極にはさまれた言説空間では、多種類で多量の自然観が繁茂している。その『あいだ』の自然観を二つに分類すれば、『宗教／世俗』両極から発する重力のつり合いをとろうとする言説と、そもそも『宗教／世俗』の二分法から自由な言説との二つが認められる。ただし、現代日本語の自然概念に対する『世俗化』(＝『世俗』の重力圏へとそれを引き込もうとする)の作用は、権力的に現存する。「自然」という語は、その作用に完全にとりこまれることなく、『脱世俗化』の契機を豊富にたくわえている。

宗教概念には明確に否定的な価値づけがなされているが、それが自然概念と結びついて語られるとき、自然概念にはほぼ無条件に付与された正の価値に上書きされるようだ。他方、世俗的な価値の称揚は、少なくとも自然概念をめぐる言説空間においては、ほとんど全くみられない。

現代日本語の言説空間における『宗教と世俗のあいだ』の一面は、以上のように記述される。そこに働く力学を、他の概念をめぐって検討しなおすことで、その説明記述の精度をあげ、『宗教／世俗』の理論モデルへとつなげることが、今後の課題である。

「自然的救済論／救済論的自然」の概念

本発表は、「自然的救済論／救済論的自然」というひとつの新たな宗教理解のカテゴリーを仮に設定し、その有効性を問う

深澤 英隆